

# アショーカ王碑文の研究 (一)

大野 達之助

## 一、アショーカ王の生涯

アショーカ(Asoka)王は印度人として国家統一を完成した唯一の帝王であり、岩石や石柱に銘記された王の詔勅によって、歴史がないといはれる印度の古代史に年代の曙光を齎し、而も仏法を自ら悟り、僧団に外護を与へて仏教を世界的宗教に発展せしめた賢聖である。

ところがアショーカ王の伝記については、北伝系統と南伝系統では可成り相違してをり、更に王自身が発布した詔勅と対照してみると、南北兩伝の資料の作者は王の詔勅を全く知らないで伝記を作成したのではないかと疑はれる程、著しい相違を示してゐる。殊に王は詔勅の中で「正覚に達した」と述べてゐるのに、学者は未だに王の正覚を認めないで、別箇の解釈を執つてゐるので、以下王の生涯を概観するに当つても、問題の焦点を王の正覚に置き、正覚に至る迄の経路と、正覚以後の事蹟とに分けて叙述を試み、詔勅を根本資料としてそれに北伝の雜阿含經、阿育王經、阿育王伝、善見律毘婆沙などと、南伝の島史(Dīpa-vāṅsa)、大史(Mahā-vāṅsa)、サマンタ・パーサーディカー(Samanta-pāsādikā)、ビルマ伝などを参照して眞実に近い伝記をまとめて見たいと思ふ。

まづアショーカ王の系譜についてみるに、北伝ではチャンドラグプタ(Candragupta 月護)ービンヅサーラ(Bindusāra)ーアショーカ王の世系を挙げ、アショーカ王は仏滅後百年に出て、パータリプトラ(Pataliputra)城に都したと伝へる。

(雜阿含  
阿育王)

經、卷二三、大正、卷二、一六二頁。) これに対して南伝によると、仏陀在世の時のピンピサーラ (Bimbisara) から阿闍世經、大正、卷五〇、一三二頁

(Ajātasattu)、ウダヤバツダカ、アヌルッダ、ムンダ、ナーガダーサカと次第するマガダ国王の系譜を挙げ、阿闍世王以下は皆父王を殺害した悪王であったので、城民等はナーガダーサカを放逐して、ススナーガ (Susunāga) といふ大臣を立てて王とした、その子がカーラーソーカ (Kālasoka 黒の阿育) で、仏滅後正に百年であったといふ (大史 V, 1—8. Samanta-pdk, 5. 南伝藏經卷六五、九一一—九二頁)

南伝では仏滅百年カーラーショーカといふ悪王アショーカを立ててゐる。更にカーラーショーカの後には十人の兄弟が王国を治め、次いで九人のナンダが次々と王となったが、第九世ダナンダの時に、チャーナキヤ (Vishnugupta, 姓はKautilya) といふ婆羅門が王を殺害して、刹帝利のモーリヤ (Moriya) 族の出であるチャンドラグプタを王に立てた。チャンドラグプタは二十四年治世し、その子ピンヅサーラは二十八年統治し、ピンヅサーラの子アショーカは九十九人の兄弟を殺害して、全印度の主権を把握した。それは仏涅槃後、二一八年であったと伝へる (大史 V, 14—21, Samanta-pdk. V, )。 (南伝藏經卷六五、九二頁)

さて大史の伝へる系譜の中で、チャンドラグプタ以前の所謂シャイシュナーガ王朝の世系は、幾種かの古伝話 (Purāna) にも記述されてをり、それ等の間には王名・世代数に多少相違がある上に、大史とは著しい相違を示してゐるので (Indian Antiquary, 1915, 1916, S.V. Venkateswara Aiyar 著「マダガ国古代史」参照)、それは当面の問題から除き、マウリア王朝の祖チャンドラグプタから論述を始めることとする。

チャンドラグプタの名は紀元前三二七年から三二五年にかけて行はれたアレクサンダー大王の印度遠征に従軍したギリシアの歴史家の記録に、サンドロコトス (Sandrokottos) と見えてゐる (Cambridge History of India, I, p. 470)。九世紀の印度の戯曲「ラークシャサの印 (Mudrārākshasa)」によると、チャンドラグプタ・マウリアは、ナンダ王家と同一氏族であつたとす (S. V. Venkateswara Aiyar 「マダ国古代史」 Indian Antiquary, 1915, p. 51.)。仏教の伝承によるとマウリア家は仏陀の遺骨を八分した中のピッパラヴァナのモーリヤ族と同一であるといふ (Cambridge History of India, vol. I, p. 470)。その

出自については明らかにし難いが、彼はナンダ王家の末期に起つた多くの反逆事件の一つに加わつて、事が露顕したために西  
北印度のタキシラーに遁れてきてゐたやうである。此処に居る間に紀元前三二六年彼はアレクサンダー大王の印度侵入に際会  
し、その雄姿を仰いで私かに大志を懐くに至つたと伝へられる。(佐保田鶴治著「印度古代史」一六七頁)。彼にはチャーナキアと  
呼ばれる婆羅門ヴィシヌグプタの輔佐があつた。古伝話によるとヴィシヌグプタはチャンドラグプタのためにナンダ王家を倒  
して、その国土と強力な軍隊と莫大な富とを相続せしめ、自らは大臣として輔佐しつづけたと伝へる。チャンドラグプタがパ  
ータリプトラ城で王位に即いたのは紀元前三二五年から三二〇年の間のことである。彼は即位すると間もなく、印度西北部パ  
ンヂャブ地方のギリシア勢力を掃蕩してマウリア王朝の基礎を固めた。

さてアレクサンダー大王が西紀前三二三年にバビロンで死去すると、その大帝国は忽ち瓦解して、版図は四人の部将の間で  
分割されてしまった。その中でシリア王となつたセレウコス (Seleukos Nikator) は、インドに於ける旧領土を回復しようとし  
て、西紀前三〇五年にインダス河を越えてインド本土に侵入してきた。チャンドラグプタはこのセレウコスの軍を邀え撃つた  
が、セレウコスは殆んど戦闘らしい戦闘を行はないうで退却し、アフガニスタンの南部とバルチスターンを割譲した上に其の女  
をも与へ、僅かに象五百頭を貰ふといふ屈辱的な協定をチャンドラグプタとの間に締結した。その後はシリア、マガダ両国の間  
に友好関係がつづき、シリアの外交使節メガステネス (Megasthenes) はパータリプトラの宮廷に両三度派遣された。(Cam-  
bridge History of India, vol. I, p. 472) メガステネスはインド滞在中、インドの地理、風俗、制度を記録し、インド古代史の最  
も重要な資料を遺した、その原本は失はれ、僅かに後世のギリシア史家の著書中に引用された断片が残つてゐるに過ぎない。  
チャンドラグプタの治績は明かでない。王の在位中にマガダ国の版図は、西はアフガニスタン、東はベンガル、南はナルバ  
ダー河まで拡がったと云はれる。古伝話 (Purāna) によると彼の治世は二十四年間 (321—297 B. C.) 続いたといひ、これは大  
史など仏教側の資料も同様に伝へてゐる。チャンドラグプタの継嗣はビンドウサーラ (Bindusara) で、ギリシア史家はアミト

ロカテース (Amirochates, Skt, Amiraghata 斬敵者の意) と呼んでゐる。彼の在位年数は古伝話による二十五年、セイロン伝の大史は二十八年であつたといふ。その治世の間にシリア王アンティオコス (Antiochos, Seleukosの子、280—261 B. C.) はダイマスコ (Daimachos) といふ使節をインドに遣はしてメガステネースと代らせた。またエジプトのプトレマイオス王家のフィラデルフォス (Philadelphos, 285—247 B. C.) 王もディオニシユース (Dionysius) といふ使節をパータリプトラの宮廷に派遣した。ギリシア史家アテネウスの伝へるところによるとビンドウサーラはシリア王に対して、葡萄と無花果及び一人の哲学者 (Sophist) を買ひ求めたいと申送つたところ、アンティオコス王は葡萄と無花果は寄贈したが、哲学者は売物ではないとの理由で拒絶したといふ。(Cambridge History of India, vol. I, p. 433, 495) ビンドウサーラの事蹟についてはインド側の資料からもギリシア側の資料からも殆んど知られるところはないが、シリア、エジプトから外交使節の派遣があつたことから見て、マガダ王国の声威が遠く西歐に伝はつてゐたことは明らかである。

ビンドウサーラが歿すると、西紀前二七三年にその子アショーカ (Asoka 阿育、阿輪迦、無憂) が後を襲いだ。その出生は長子マヒンダの誕生の年から推定して紀元前三〇四年とされてゐる (R. Mookerji, "Asoka" p. 44) アショーカはそれから四年を経てパータリプトラに於て即位灌頂の式を挙げた。(大史V, 14. Samanta-pdk, 4) (南伝蔵経卷六五、五五頁) この即位式を四年間延引した理由は、確実な資料からは何も分らない。但し、その即位をめぐつて種々の伝説が物語られてゐる。先づ北伝について見ると、ビンドウサーラ王は瞻婆

(Campa) 国の婆羅門の女を納れて第一夫人とし、阿輪柯 (Asoka) と毘多輪柯 (Vitasoka) の二子をまうけた。ビンドウサーラ王には既に修師摩 (Susima) といふ長子があつた。アショーカは身体が鈍滂であつたので父王は愛しなかつた。たゞ西北境の徳叉戸羅 (Takshasila) 国が叛乱を起したので、王はアショーカを遣はして之を討伐せしめた。タキシラの城民はアショーカが来たことを聞いて、道路を修治し城郭を莊嚴して奉迎し、心から服従の意を表明した。アショーカはついで佉沙 (Kashgar) 国に至り、こゝをも降服させて辺境一体を平定した。長兄のスシーマは都に於て或る時、道で一大臣に無礼な振

舞をしたのでその大臣の怨を買ひ、やがてすべての大臣がスシーマを退けてアショーカを立てようとの心を懐くに至った。時にタキシラ国が再び叛乱を起した。ビンドウサーラ王は今回はスシーマを遣はしてこれを討たせたが、容易に平定することが出来ない中に、やがて王は重病に罹った。王は代りにアショーカを派遣しようとしたところ、諸大臣は王の余命幾許もないのを見て、アショーカに衣冠を著けさせ、王の御前に出てアショーカに王位を継がせることを願った。王はこれを聞いて憤りのあまり血を吐いて命を終った。そこでアショーカは王位を継ぎ、成護 (Radhagupta 雜阿含經は阿菟樓陀 Anuruddha) を第一大臣に任命した。スシーマは父王の死とアショーカの登位を聞いて憤り、兵を率いて都へ攻め上ったが、アショーカの詭計に陥って滅亡したといふ。(雜阿含經卷二三、大正、卷二、一六二—一六三頁。阿育王經、一、大正、卷五〇、一三三頁。)

南伝によるとアショーカは父王ビンドウサーラからアヴァンティ (Avanti) 国の統治を命ぜられ、副王としてその首都ウツヂエーニー (Ujjeni) へ赴く途中、ヴェーディッサ (Vedissa) 市に到ったとき、其処の長者の女デーヴィー (Devī) を娶って妃とし、ウツヂエーニーに伴ってマヒンダ (Mahinda) とよふ王子とサンガミッター (Sanghamitta) といふ娘を設けた。ウツヂエーニー滞在中にアショーカは父王の病氣危篤の報を受けたので、ウツヂエーニーを捨てて都パータリプトラに帰り、城中を従へ、父王の死後、長兄スマナ (Sumana, 北伝の Susima) を殺害して王位を継いだといふ。(島史 IV:15. 大史 V:39. 9. XII:8-11) (緬甸伝一七、四七八—四七九頁) また王位を継ぐ際にアショーカは、同母弟のティッサ (Tissa) だけを除いて異母兄弟九十九人を殺害し、四年後に即位灌頂の式を挙げてからティッサを副王の位に即かせたといふ伝もある。(大史 V:20, 33. Samanta-pdk. IV.) (南伝藏經卷六五、五五頁) アショーカ王の即位をめぐる事情は南北伝で或る程度の相違を示してゐるが、長兄を亡ぼして即位したといふ点では一致しているもので、若し大史等が伝へるやうに王位継承から即位灌頂まで四年あったとすれば、その間は長兄と王位の争奪を続けてゐたものであらう。

アショーカ王の即位後の行為については南伝と北伝との間に大きな相違がある。先づ漢訳北伝を見ると「五百の大臣の殺害」、

「五百の宮女の焚殺」、「地獄舎」の物語が記されてゐる。「五百の大臣の殺害」とは諸大臣がアショーカを推戴した功を誇つて王を軽侮する態度を示したので、これを斬殺したことであり、「五百の宮女の焚殺」とは王が醜く皮膚の龜裂であるのを宮女達が嫌ひ、王の睡眠中に王と同名のアショーカ樹（無憂樹）の花枝を折ってしまったのを怒り、宮女達を繫縛して悉く焼殺したことである。「地獄舎」或は「愛樂獄」の伝説といふのは、大臣成護（雜阿含經では阿菴樓陀）が断罪のことは屠殺人に委すべき由を奏したので、王は極悪人耆梨（Chhila）なる者を捜し出し、立派な構造の獄舎を造り、一步この中に足を踏み入れた者は地獄の訶責を以てこれを殺すことを許した。或る長者の遺子で出家となつた者が乞食しながらパータリプトラ城に來り、一日、知らずにその地獄舎の門をくぐつた。耆梨は早速これを殺さうとしたが、比丘の懇請によつて七日の猶予を与へた。すると比丘はその間に勇猛精進して禪觀をこらし、遂に阿羅漢道を得た。さて七日の期限が來たので耆梨は比丘を油釜の中へ入れて殺さうとしたが火がどうしても燃えない。暫らくすると自然に点火、猛烈に燃え上つた。ところが釜の蓋をとつて見ると、比丘は蓮華上に結跏趺坐してゐたので、驚愕してこのことを王に報告した。王は早速獄舎に來り、比丘の示す種々の神變を見て深く仏法を敬信するやうになつた。そこで比丘は仏の未來記として、「仏滅後百歳を過ぎた時にパータリプトラに阿育といふ王が出世し、轉輪王となり、正法を以て統治するであらう。また我が舍利を分布し、閻浮提に八万四千塔を立てるであらう」と告げ、宜しく一切衆生を愍み、仏法を修行すべきであると説いた。王は比丘を礼拝して仏法に歸依し、早速獄吏耆梨を焼殺し、地獄舎を破壊せしめたといふ物語になつてゐる。

（雜阿含經卷二三、大正、卷二、一六四頁。阿育王傳、大正卷五〇、一〇一—一二頁。阿育王經、大正、卷五〇、一三三頁。参照、ターラナータ、五〇—五一頁）

このやうに北伝では仏法歸信以前のアショーカ王を惡逆な君主として描いてゐるのに対して、島史、大史等のセイロン伝では非道な行為について極めて簡略に扱ひ、即位以前の長兄スマナの殺害、異母兄弟九十九人の殺害に一言触れてゐるに過ぎず、島史とサマンタパーサーディカーでは却つて、アショーカ王が即位した時その威徳によつて、諸天がヒマラヤ山頂から各種の藥草で充ちた水を運んだり、諸竜は日々龍宮から種々の香料、縫目なき妙好華の布、高価な眼藥を持ち來り、迦陵頻伽鳥は妙

音で囀り、王に供養を捧げたなどと叙してゐる。(島史 VI, 1—14; Samanta-pdk. 4, p. 55)  
(南伝藏経卷六五、五五—六頁。)

北伝が入信以前のアショーカ王を悪逆の君主として描いたのは、入信後の慈悲の天子の性格を顕著に現はさうとするためであり、かの仏在世時代の阿闍世王に用ひた筆法と同様である。南伝では二人のアショーカ王をつくり、仏滅百年に出たのをカーラーショーカ、即ち「悪虐アショーカ」とし、仏滅二百十八年に即位したのをダルマーショーカ、即ち「法アショーカ」として區別してゐる。南伝が何故二人のアショーカ王を仮作し、それぞれ仏滅百年と二百十八年の出世としたかは、仏滅年代に關係するので、他日に譲ることとする。ところで南伝はカーラーショーカ王についてさへ、たゞ名を挙げてゐるだけで何等悪虐な行為を物語つてゐない。南伝、即ちセイロン伝のこのやうな叙述の態度は、セイロン島の仏教はアショーカ王の治世に王子マヒンダが伝へたものであり、セイロンの仏教徒にとってはアショーカ王は大檀越であるところから、当初から偉大な帝王であつたやうに削筆潤飾したものではないかと想はれる。

次に南伝では即位後の事蹟をどのやうに叙してゐるであらうか。島史によると王はニガンタ派などの婆羅門を王宮に屈請して多大の布施を行った後、甚だ困難な質問を提出したところ、彼等は誰も答へられなかつたので、王は異端を退け、阿羅漢道を求めたといふ。(VI, 27—32) 大史及びサマンタパーサーデーカ(大史 V, 34—36。 Samanta-pdk. IV, )によると、王は父のビンドウサーラと同様に婆羅門の信奉者で、毎日六万人の婆羅門を供養してゐたが、食事の際に彼等の諸根寂靜ならず、威儀の調はぬのを見て、彼等には内心眞実なしと知つて、相当の食事を与へて追放したといふ。(南伝藏経卷六五、五七—八頁。)

王に關する最も確実な資料である碑銘詔勅について、即位前後の事蹟を拾つて見ると、王は一般のインド帝王と同様に歌舞、宴遊を行つたり(岩石詔勅、第一章)、或は遊獵の享樂に日を送るといふ生活をしてゐた(同、第八章)。また即位の当初、僧伽に分裂の兆があつたらしく、小石柱詔勅を發布して「何人も僧伽を破るべからず、就中、比丘・比丘尼にして僧伽を破るものは、白衣に更へて擯出せらるべし」と警告を与へてゐる。この小石柱詔勅を最初に置くことは Hultzsch 以下西欧の学者も、宇井博士

も認めてゐないが、これは仏教僧伽の根本分裂及び第二結集と結びつけて考へなければならぬ。根本分裂については異部宗輪

論(西曆一世紀の世友 Vasumitra 作。唐の玄奘訳)に「仏薄伽梵般涅槃後、百有余年(部執異論、十八部論、去レ聖時淹、ヒサシク、如ニ日久没一。摩竭陀国

俱蘇摩城(Kusumapura=Paliputra) 王号ニ無憂一。統ニ摂瞻部(閻浮提即ちインドのこと)一、感ニ一白蓋一、化洽ニ人神一。是時仏法大衆

初破(寺本婉雅著、三一四頁)と記して、仏滅百十六年にパータリプトラ城に君臨してゐたアショーカ王治下に於て仏教僧伽が初めて

分裂したと述べてゐる。この分裂は所謂、大天の五事によつて大衆部と上座部の根本二部に分派したことをいふのである。

第二結集といふのは、仏滅後百年、アショーカ王の治世の初に(大史はカーラーシヨカ) 跋耆子比丘が十事の非法を唱へて

僧伽に分裂の兆が萌したので、ヴェーサーリーに於て正統長老達の七百人會議が開催され、十事を否定して更めて法結集を行

つたことをいふ。第二結集のことは島史、大史、サマンタパーサーディカーの南伝も、善見律、五分律、四分律、十誦律など

の北伝も一致して伝へてゐるので、この伝承は史実に基いてゐると認められてゐる。それ故にアショーカ王の小石柱詔勅はこ

のやうな僧伽分裂の紛争を抑圧しようとして発布したものと見るべきであり、決してスミス (Asoka, p. 24, n. 2, p. 54, p. 217)

やフルチュ (Inscriptions of Asoka, p. xlvii) のやうに、その年時を石柱詔勅の発布された即位二十七年よりも以後に置くべき

ではない。詔勅の発布年時については別に論述したいと思ふ。

このやうにアショーカ王は即位後五、六年頃まではインド一般の専制君主と同じやうに外に向つては武力侵略、内に対して

は強権政治を行つてゐたやうである。それが即位六年頃から仏法に関心を懐き、僧伽に親近するやうになった。小岩石詔勅に

「余、はじめ信居士であつた二年有半の間は、勉めて精進することもなかつた。しかるに僧伽に親近するに至つた一年、いな

一年有半の間は、憤悱し精進に務めた。顧みて惟ふに、從來、閻浮提の民衆は諸天と交渉することはなかつたが、今や交渉し

得るに至つた。これは精進の成果である。」と述べてゐる。こゝに二年有半と一年有半、合せて四年間とあるのは、王が正覺

に達した即位十年に至る迄の期間で、信居士になつたのは即位六年頃になるわけである。もっとも、アショーカ王が僧伽に親

に達した即位十年に至る迄の期間で、信居士になつたのは即位六年頃になるわけである。もっとも、アショーカ王が僧伽に親



近したといふのは、*dhikkhu-gatika* 即ち、諸の比丘と同じ精舎に住む人になったのであると解する説もある。

〔宇井博士「印度哲学研究」第四

卷、三  
一八頁）

王が信居士として仏法に関心をもつてゐたとき、即位八年にカリンガ国の征服を行った。カリンガ国とはインドの東海岸マハーナディー、ゴダーヴァリー両河の中間の地方にあった王国であり、メガステネースの印度見聞記 (*Indika*) の伝へるところによると、カリンガの王は歩兵六万、騎兵一千、象軍七百の常備軍を保有してゐたといひ、アショーカ王より約百年後に出た有名なカリンガの国王カーラヴェーラ (*Kharavela*) の碑文によると、カリンガの人口は三八〇万あったと記されてゐる。

(*R. Mookerji "Asoka" p. 16, p. 162, n. 3*) とにかくアショーカ王時代に於て強大な兵力をもつた東南インドの強国であったことが分る。このカリンガ国を即位八年に征服したのである。カリンガ征服のことは仏教の資料に何等伝へられてゐないが、岩石詔勅第十三章に「王、天子慈眼の灌頂八年、カリンガは征服された。捕虜十五万、殺戮十万、戦禍に死するものその数倍に及んだ」と記されてゐるから、これは疑ふ余地のない事実であつたのである。南伝、北伝ともに一言もこれに触れてゐないのは、まことに奇異と言はなければならぬ。

カリンガ征服の悲惨な戦禍は、アショーカ王に勝利者の悲哀を痛感させ、大きな精神的打撃を与へた。同詔勅はつづけて「カリンガを征服したことは天子の悔ゆるところとなつた。曾て征服されたことのない国を征服すれば、必ず住民の殺戮、惨死、虜獲等を見る。それは天子の甚だ苦痛とし、悲痛とするところなのである。」といひ、なほつづけて種々な惨害の事情を述べ、最後に「一切の勝利に卓絶せる勝利は徳化の勝利である」といふ結論に到達してゐる。つまりカリンガ征服を転機としてアショーカ王は極めて熱心に仏法に精進し、一年有余の間内観を深めた結果、遂に即位十年に至つて正覚に達したのである。

〔岩石詔勅  
第八章〕

「正覚に達した」と読んだ原文は、シャーバーズガリー所在の刻文によると *nikrami sabodhi* であり、ギルナル所在の刻文

では *ayaya sambodhin* となっている。nikrami は動詞 *nish-kram* の三人称単数不定過去の形であり、*ayaya* は語根 *i-* の三人称単数已過去の形とされてゐる。*nish-kram* は通常「出掛ける」「出発する」の義であるが、引伸義では「愛欲を捨てる」「正精進を示す」といふやうに用ひられる。i も「行く」の義であるが、「達する」「得る」の義もある。これらは古典梵語の用法であるが、アショーカ王の詔勅は当時の口語で書かれてゐるので、用語が必ずしも梵語の意味に当てはまらないことは、幾多の例証がある。仏教梵語で書かれた法華經を見ると、見宝塔品に *na tavan niriyato 'nuttarayāṃ samyak-sambodhan* の用例がある。(荻原雲来校訂「梵文法華經」二卷、二〇八頁一三行) この意味は「その間は無上正等覺に達しなかつた」であるが、こゝに「達する」といふ意味に、*nish-kram*, *i* と同類の *nir-ya* の語を用ひてゐる。而も達する目的は *sambodhi* 即ち「正覺」である。*sambodhi* は仏教用語としては「正覺」と読むべき語である。従つて詔勅の *nikrami sambodhi* は「正覺に達した」と読むのが、用語法から云つて穩当のやうに思ふ。

ところが東西の大部分のインド学者は、正覺者は釈尊だけであるといふ先入觀に支配されてアショーカ王が正覺を得たといふなど不可能なこととしてゐる。早い頃の学者が試みた此の箇處の翻譯を列挙すると、C. Lassen は “gelangte er...zur vollendeten Einsicht”, Bhagwanlal Indrajī は “reached true knowledge”, M. Senart は “set out for perfect intelligence” Bühler は “went forth in search after true knowledge” V. A. Smith は “went forth on the road to wisdom”, Rhys Davids は “set out for the Sambodhi—that is to say, he had set out, along the Aryan Eight-fold Path, towards the attainment (if not in his present life then in some future birth as a man) of the state of mind called Arahatsip” などが主なものである。Lassen, Bhagwanlal Indrajī を除いて他のものは、「正覺に向つて出発した」「八聖道によつて阿羅漢位に向つて出発した」といふ意味に解してゐる。

これに対して D. R. Bhandarkar は新しい解釈を試みて次のやうに論じてゐる。「原文は *pathito* (求めた) ではないか

ら、『sambodhi に向つて出發した』ではなく、『sambodhi に行った』である。さうすると此処でサムボーディはどういふ意味に解すべきであるか。すべての学者が讀んだやうに、正覚の意味に讀むべきであらうか。しかし、Senart の指摘したやうに、アショーカーが正覚に達したと主張してゐるやうに認めるのは不可能である。niskram という動詞は、いつも動作を表はすから、サムボーディはこの場合、仏陀が正覚に達した場所の意味でなければならぬ。」と。(Indian Antiquary, XLII, p.159—160; Asoka, p.321 n.2) として Divyavadana (漢訳の阿育王伝) に bodhi が仏陀正覚の場所の意味に用ひられてゐるのを引証してゐる。これ以来、R. Mookerji や E. Hultzsch などの学者はこの説に左袒して、正覚の場所或は菩提樹を訪れたと解釈するやうになつた。成程 sambodhi を菩提樹の意味に用ひてゐる例は島史にも散見され(第十六章、一、一三、二四、三〇行)、中村元博士も本生譚の用例を引用して、菩提樹の意味に取つてゐる。(仏教史学第五卷、第一号、十一頁)

けれども宇井博士も説いてゐるやうに、(印度哲学研究、第四、二七八頁) 三菩提は通常は正覚又は等覚と訳され、仏陀の大悟を指すのであり、しかもアショーカー王の詔勅は一般の民衆に理解出来るやうに、極く通途の意味に随つてゐるのであるから、サムボーディも「菩提樹」といふ特殊な意味ではなく、「正覚」といふ一般的な意味で用ひたと推断せざるを得ない。サムボーディを正覚の意味だとすれば nikrami sabodhi は「正覚への道に入った」か「正覚に達した」かの二つの意味に限られる。その何れを探るべきかは、管見を以てすれば後者の意に解すべきやうに思ふ。それは即位八年のかのカリンガ征服の結果に対する悲痛なまでの懊惱、それ以来一年有余に及ぶ精進を経て即位十年のこの事件に至つたこと、そして同年に發布したと云はれるカルカッタ・バイラート詔勅に(宇井博士「印度哲学研究」第四卷三三六頁) 「諸大徳、仏陀世尊の説き給ふ所は如何なることにても、すべて是れ善言なり。而も諸大徳、余が以下に挙示する所は正法にして、余はそが永く存するを得べしと確言する資格を有す」と述べて、七つの經典を列挙してゐること、また即位十二年から十三年にかけては十四章から成る岩石詔勅を發布して、民衆の徳化に努め、而も民衆教化のために「教法大官」といふ特別な官職を設置したこと、更には最晩年の石柱詔勅第七章の中

で、「人々の徳の増進は唯正に二つの方途によって達成されるものである。即ち、徳目の遵守と内観とである。しかしながら、この中、徳目の遵守は軽く、内観によってこそ大いに増進するのである」と自己の体験の結論を述べてゐることなどを総合すればアショーカ王が正覚を得たことは是認さるべきであると思ふ。中村博士はアショーカの菩提樹参詣を立証するのに、王が菩提樹に香水をかけて供養したといふ阿育王伝の記事と、王が菩提樹を石垣で囲んだといふ玄奘の大唐西域記の記載を引用されてゐる。(仏教史学、第五卷、第一号、六頁)アショーカは即位二十一年に仏誕生地のルンビニー園に巡幸し、程遠からぬコーナリーカマナ仏塔にも参詣してゐるので、(兩処に詔勅銘記の石柱現存す) 仏成道のガヤーの地に巡幸したであらうことは当然考へられるが、それは自分が正覚を得たから釈尊を偲んで、釈尊因縁の地を巡幸したのであり、その途次に於て沙門・婆羅門等に布施を行ひ、人民に教法を説いたから、自ら「法の巡幸」(dharma-yātra)と呼んでゐるのであつて、菩提樹参詣と正覚を得たこととは、別のこととがらであると思ふ。

さて南北兩伝を見ると、アショーカ王の碑文については全く知らないらしく、カリンガの征服を一言も伝へず、王の仏教帰信をそれぞれ異つた形で伝へてゐる。北伝の方は地獄舎に入った一比丘の教誡によつて仏教に帰依するやうになつたといふ説話を伝へてゐるのは前述した通りである。また阿育王伝及び阿育王経ではニガンタ(ヂャイナ教徒)の殺戮のことを伝へてゐる。即ち、ニガンタの弟子が仏像を画いて、それがニガンタ(ヂャイナの教祖マハーヴィーラを指すか)を礼拝してゐるやうな構図であつたので、アショーカは大いに瞋り、一日の中に一万八千のニガンタを殺した。そして更にニガンタの首に賞金を懸けて探し出させた。偶々、王弟スダッタ(Sudatta)——阿育王経ではヴィターシヨカ(Vitāsoka)——の服装、容貌がニガンタに似てゐるところから、誤つて殺されてしまった。アショーカはスダッタの首を見て深く懊惱し、大臣の言を聞いて衆生に無畏を施すに至つたといふ。(大正、卷五〇、一〇七頁) これも地獄舎の物語と同巧異曲で、或は指鬘外道の説話にヒントを得て創作したものかも知れない。(同、一四三頁)

次に南伝の方では王甥ニグローダ (Nigrodha) の示教によって入信したといふ物語になつてゐる。それはアショーカーが父王の死後、長兄スマナを殺害して王権を把握した時、スマナの妃は逃れて賤民チャンダーラの村へ赴き、其処で王子ニグローダを生んだ。ニグローダは成長の後出家し、その剃髮室に於て阿羅漢位を得たといふ。彼は母に逢ふために母の住む村へ赴く途中、都に入り王宮を通りすぎた。アショーカー王は彼の寂靜な態度を見て心に喜びを生じ、親しみの情を起して直ちに王宮に請じ入れ、釈尊の教へを尋ねた。するとニグローダは「不放逸は不死への道であり、放逸は死への道である。不放逸なるものは死せず、放逸なるものは死者の如くである」と「不放逸についての教へ」を説いた。アショーカーはその時、最高の因 (agga-hetu) 即ち不放逸を悟り、仏法僧の三宝に帰依したといふ。(大史、V, 41—72. Samanta-pdk, IV. 南伝藏經毘婆沙第一、縮、) 卷六五、五九—六二頁。島史、VI, 34—56. 善見律寒八、六丁右、左)ビルマ仏伝では王の精神の大転化を即位後四年目に起つたこととしてゐる。(緬甸仏伝、第十七章、) 四八一—四八二頁)

さて即位十年以降、つまり正覺を得た後のアショーカー王の事績と思はれるものを、南北両伝について見るに、いづれも布施・供養、精舎・仏塔の建立、第三結集(南伝だけ)、教法弘通などに互つて記してゐる。いまそれらの事績について南北伝を略述しながら、詔勅の記事と比較してみようと思ふ。

先づ布施・供養について南伝のサマンタパーサーディカーは次のやうに記してゐる。アショーカー王は父王ビンドウサーラが婆羅門の信奉者であつたので、即位の初は父に倣つて婆羅門や婆羅門姓の外道パンダランガ・パリッバーヂャカ等六万人に日々食事を供してゐたが、ニグローダによつて仏教に帰依してからは、婆羅門等の食事をやめて六万人の比丘に宮殿内で常時食事を給したといふ。(南伝藏經、卷六五、五九—六二頁)北伝の阿育王伝は次のやうに伝へてゐる。

アショーカー王が深く三宝を信じて常に衆僧を供養するのを婆羅門達は嫉妬し、王の心を翻へさせようと図つた。一人の善呪といふ婆羅門が自在天に化して、四九九人の婆羅門を率ゐて王宮に到り、仏教徒を噉はんといつたところ、鶏頭末寺の一沙弥の法力に敗けて、皆仏道に入り、預流道を得たといふ。(大正、卷五〇、) 一—二九頁しかし王の詔勅には婆羅門を排斥して、仏教徒の

みに布施を行ったといふ記述はなく、寧ろ沙門(仏教徒)、婆羅門には等しく布施を行ひ(岩石詔勅第八章、且つ「教法大官」をし章、第九章)、また即位十二年と十九年にはアージーヴィカ派にバラール窟院を寄進してゐる(石柱詔勅、第七章。二五―二六行)。サーディカーと阿育王伝の記事は、仏教徒と婆羅門教徒との反目が激しくなった時代に、仏教徒の手によって作為されたものであらう。

サマンタパーサーディカーは王が比丘のために医薬の設備をととのへたことを次のやうに伝えてゐる。王の即位八年に長老ティッサが病気を治さうとして行乞したが掌量の酥も得ることが出来ないで般涅槃したことを聞き、「我が治世に於てかくの如きの比丘に資具の得がたきことのありけるかな」といって、城の四門に倉庫を造らせ、薬品を満たして施与したといふ。

(南伝藏經卷六五、六七頁。大史、V, 224—225) 医療施設を設けたことは、詔勅の中にも、インド本土は勿論、セイロン島、シリアなどの隣接地方に人間と家畜のための医療所を設け、人畜用の薬草のない処にはこれを移植させたと見えてゐる(岩石詔勅第二章)。

精舎・仏塔の建立について見るに、南伝は八万四千の精舎の建立を説き、北伝は八万四千塔の造立を説いてゐる。南伝によるとアショーカ王は目犍連子帝須(Moggaliputta-Tissa)から、帝須の説いた法に八万四千の法蘊があると聞いて、八万四千の都市に九六コーティ(千万)の金を与へて精舎を建てしめたといふ(島史III, 8. 大史V, 73—79. Samanta-pdk. IV)。これに対して北伝によると、アショーカ王は塔を造立供養しようと思つて王舎城に赴き、阿闍世王が建立した八箇所の塔のうち、ラーマ村の塔を除いた七つの塔を悉く壊して中の仏舍利を取り出し、八万四千の宝篋を作つて一宝篋中に一粒の舍利を納れ、全国土に遍く八万四千塔を造つたと伝えてゐる(阿育王伝、大正、卷五〇、一〇二頁。阿育王経、大正、卷五〇、一三五頁。参照、雜阿含經、第二二、縮刷、辰三、三四右左)。

更にセイロンの史書大史はアショーカ王が釈尊の往来した因縁の地に精舎(ceitya)を建立したことを記し(V, 175)、漢訳の阿育王伝、阿育王経も王が尊者ウパグプタ(Upagupta)の案内によつて、仏の遊行の地、即ち誕生地のルンビニー園を始めと

して、ガヤーの菩提樹、初転法輪の古仙林 (Rsiapatana)、般涅槃のクシナガラに塔を建て、更に祇陀林 (祇園精舎 Jetavana) 中の舍利弗塔、目犍連塔、大迦葉塔、婆駒羅 (Vakkula) 塔、阿難塔など仏弟子の塔を供養したと伝へてゐる (阿育王伝、大正、卷五〇、一〇四頁、阿育王経、大正、卷五〇、一三八頁、  
雜阿含経卷二三、大正、卷二、一六七—八頁。)。

以上南北両伝を比べて見ると、北伝が塔の造立、供養を説くに対して、南伝は精舎の建立のことだけを説いてゐる。これは阿育王伝等の成立した当時、中インドのマガダ地方を中心とした大衆部系統の仏教徒が塔の崇拜を強調したのに対して、セロン僧伽の属する上座部の分別説部では舍利塔の恭敬供養に重きを置かず、僧伽の供養崇拜の功德を主張したことによるものであらう (中村元博士「アショーク王の宗教政策」仏教史学第五卷第一号、第八頁)。

八万四千といふ数字が何を寓意するか明らかではないが、そのやうに多数の塔や精舎が建てられたといふことは、到底歴史事実とは考へられない。たゞ北伝の仏因縁所に塔を建てといふ伝説には注意を払ふ必要がある。五世紀に入竺した法顕の「外国記」、また七世紀に入竺した玄奘の「大唐西域記」に、アショーク王建立の塔といふものが、仏因縁処に在ったと記してゐる。「大唐西域記」の記すところでは、その数一三〇以上に達するといふ (中村博士、前掲)。論文、七頁。これらの塔を実際にアショーク

王が造ったかどうかは疑はしいが、ニガリー・サーガル石柱詔勅に、コーナーカマナ仏塔を二倍に増築したと述べてゐるから、それまでに存在した何箇処かの塔を二倍に増築したり、或は新しく造つたりしたことはあつたかも知れない。尤も仏誕生地のルンビニーや初転法輪地のサルナートの石柱には、そのやうな勅文は刻されてはゐないけれども。アショーク王以前に釈尊の舍利塔があつたことは、大般涅槃経に釈尊の遺骸を荼毘に附した後、八人の王侯が遺骨を八分して、各々の領國に塔を造立供養した記事があり、それらの塔の一つと思はれるものが、カピラヴァスの南東九哩の地点にあるピプラーフワー (Piprahwa) 村で一八九八年ペック (W. Peppé) によって発掘されてゐるので、ほぼ確實と考へられる (JRAS. 1898, p. 575)。

またサーンチーの大塔の核心をなす部分は、アショーク王時代の建立であることが、考古学的研究によって明らかとなつた

(J. Marshall "A Guide to Sanchi" p. 31)。"ハルハットの塔も同時代のもの"と云はれる。(E. Hultzsch, ZDMG., 1886, S. 58) それ故にアショーカ王以前からあったものも、王自身が建立、増築したものも、次の時代のシュンガ王朝、アンドラ王朝時代に造られたものも同じやうに墳丘形をなしてゐるので、それらを悉くアショーカの建立に帰したものであらう。

次にアショーカ王の治世に第三結集が行はれたといふ伝説は、島史、大史、サマンタパーサーデーカー等のセイロン資料に見えるだけで、北伝には殆んどその痕跡が見出されない。島史(III)と大史(V)は次のやうに伝へてゐる。仏滅後二二六六年を経た時に、仏教僧伽が王の帰依を受けて比丘の所得が増大したので、アージーヴィカ其の他の外道が仏教僧伽に入り込み、自分達の説を仏説なりと公言して僧伽を紊した。そこでアショーカ王はガンジス河の上流アホーガンガ山に隠棲してゐた長老モツガリプッタ・ティッサを都に招き、阿育園に於て比丘僧伽の集会を行はせた。そして一々の比丘を呼び、仏陀の説は何かと訊ね、邪見のものを僧伽から追放し、最後に長老ティッサから仏陀の教説は分別説(Vibhajjavādin)であるといふ結論を聞いた。ティッサは僧伽の和合が回復したので、一千人の大比丘を集めて正法の結集を行ひ、他の諍論を破つて「論事」(Kāṭhāvastu)を作った。これが第三結集で王の治世の第十七年のことであつたといふ。しかし第三結集が歴史事実でないことは、アショーカの詔勅に一言も触れてゐないことから推断出来るし、それがセイロン仏教徒の仮作であることは、宇井博士が「錫蘭の分別説部のものが、自部が上座部中の眞の正統派、従つて仏教の正系であることを示す為に、錫蘭に移る直前仏教に熱心な阿育王治下に於て外道他派を排して正醇な僧伽となつて結集をなし、それを其儘錫蘭に伝へたとなささんが為に創出したものであらうと思ふ」(「印度哲学研究」第二卷、九九頁)と結論的に論じてゐる通りである。スミス(V. Smith)は詔勅に第三結集の見えないところから、これは最後の石柱詔勅発布の即位二十七年から王の晩年に至る十年か十一年の間に行はれたものかも知れない(Asoka, p. 55, p. 217)と論じてゐるが、當を得てゐるとは云へない。バンダーカー(D. R. Bhandarkar)は折衷論として、「パータリプトラの結集は決して全体会議ではなく、部分的集會と見做される」(Asoka, p. 99)と解釈してゐる。



次に仏法弘通については、精疎のちがひはあつても南北伝ともに長老派遣のことを伝へ、またサーンチー第二ストウーパから出土した舍利壺の銘文にも、これに関係のある長老の名が刻されており、更にアショーカ王の詔勅にも辺境諸国へ使節を派遣し、教法を宣布したことが見えるので、これは歴史の事実であらうと思ふ。

先づ南伝を要約すると、長老モツガリプッタ・テイッサは第三結集を終つて後、将来教法が辺境諸国に弘通することを神通力によって觀察し、マツヂャンティカ以下の長老を諸方に派遣したといふ。長老の名と派遣された国名を島史によつて表示すると次のやうになる。

長老名 國名

Majjhantika Gandhāra (大史はKasmira, )  
(Gandhāra)

Mahādeva Mahisa (大史はMahisaman dala) ……南印度のGodavari河とKistnā河の間のAndhra地方

Rakkhita 欠 (大史はVanavāsa) ……南部印度の地。或は北部のKānaravとあるBanavāsīの町かといふ。

Dhammarakkhita (Yona人) Aparantaka ……西北の辺境で今のPanjābの西部

Mahādhammarakkhita Mahārattha ……Godavari河の上流, Bombayの東北一帯

Mahārakkhita Yavana ………印度の西北境Yavana (ギリシア人), Baktria人の住せし地方。

Majjhima, Durabhisāra, 雪山地方 ………Nepāl地方。

Sahadeva, Mūlakadeva

(大史はMajjhimaのみ)

Sona, Uttara Suvannabhūmi ……一般にBurmaの沿岸Pegu, Moulemeinと云はる。

Mahinda Lan kā ………Ceylon島

(大史は Mahinda, Ithiya, Uttiya,  
Sambala, Bhaddasāla)

これ等の長老の中で雪山地方に赴いたマツヂマの名は、サーンチー第二ストゥーパから出土した小さな水晶の舍利壺の蓋にも刻されており、ドゥラビサーラはサーンチー西南六マイルにあるソーナーリのストゥーパから発掘された水晶舍利壺の刻銘のドゥドゥビサラ (Dudubhisara) と同一人であらうといはれてゐる。(JRAS., 1905, pp. 683ff., 中村博士「アショーカ王の宗教政策」仏教史学、第五卷、第二号、三七頁)。一方、北伝の阿育王伝、阿育王経ではマツヂヤンティカ (Skt. Madhyantika) の麁賓 (カシユミール) 教化を説話的に説いてゐるに過ぎない (大正、卷五〇、一一六頁)。

アショーカ王の岩石詔勅には「教法大官等は諸宗派に互つて、ヤヴァナ、カンボーヂヤ、ガンダーラ、ラーシユトリカ、ピティニカ、その他西辺の諸民族に及ぶまで、それらの教法の育成と増進と、また教法に率由するものの幸福とに努める」(第五章) とあり、また「その近隣諸国はアンティオコスと呼ぶヤヴァナ王、そのアンティオコス王国より彼方のトレミー、アンティゴノス、マガス、アレキサンダーと呼ぶ四王の国々六百由旬にまで及び、又南はチョーダ、パインディアヤからセイロンにまで及んでゐる。ヤヴァナ、カンボーヂヤ、ナーバカ、ナビティー、ボーヂヤ、ピティニカ、アンドラ、パリダの我が版図は言ふ迄もなく、以上すべての地に於て天子の教法が行はれてゐる。なほ天子の使節の到らぬところに於ても、天子の教法の説明、勅命、教法の宣示を聞いて、已に教法を遵奉したのもあり、また遵奉するやうになるものもあらう」(第十三章) とも見えてゐるから、教法弘通のために使節を辺境の諸地方に派遣したことは史実であつたと云はなければならぬ。

従つて島史がアショーカ王の即位後十八年に、王子マヒンダがセイロンに来島したと伝えてゐるのも、信用し得るかも知れない。ところが大唐西域記によると、マヒンダをアショーカ王の弟とし、仏滅後百年にセイロンに渡つて正法を弘めたといふ(第一一巻。大正、卷五一、九三四頁)。けれども仏滅後百年はアショーカ王即位の初であり、サマンタパーサーデイカーによると、即位の年はマヒンダ十四歳であつたと伝へるから (南伝藏経、卷六五、八八頁)、即位初年の伝道よりは即位十八年の伝道と見るの

が妥当であらう。

最後にアショールカ王晩年の事蹟を南北兩伝について見るのに、叙述の内容は異なるが、不幸の裡に崩じたと伝へてある点では一致してゐる。セイロンの大史は次のやうに記してゐる。王の即位十八年に大菩提樹がセイロンに移植されてから第十二年の後に、仏陀を厚く信仰してゐた王妃のアサンデイミッターが歿した。王はテイッサラッカーを立てて王妃としたが、この王妃は容色を誇る愚かなもので、「王は妾よりも大菩提樹の方を崇められる」といって怒り、遂に大菩提樹を枯死せしめてしまつた。それから第四年の後に王は在位三十七年で崩じたといふ（大史XIX, 110）。

南伝にはこれだけの簡単な記事しかないが、北伝になると半菴羅果の因縁談にまとめてゐる。即ち、アショールカ王は昔、須達多（給孤独ともいふ）長者が百億金で買ひ求めた祇園精舎を仏陀に布施した例に倣はうとし、九十六億金を費して八万四千塔及び声聞塔を建立した。たゞ病に罹つて再び起つ能はざるを悟り、クナーラの子サンパデーを太子に立てた。そして残りの四億金を僧伽に布施してさきの所願を果さうと考へた。ところが大臣はサンパデー太子に説いて、王が庫藏の珍宝を自由にすることを禁止せしめ、たゞ一箇の金器を食器として用ひることを聴した。王は食事が終ると、この金器を僧伽に施与したので、金器を禁じて銀器を用ひさせた。ところが銀器も同様に施与したので、次には鉄器、更に瓦器に代へ、最後には半分のマンゴの実しか王に聴さなかつた。王は最後の布施としてこの半分のマンゴ果実を衆僧に施し、身体を扶け起させて僧伽に向つて合掌し、この大地一切を僧伽に施入すると宣言して命を終つた。そこで大臣は諸臣とはかり、アショールカ王が残りの四億金をととのへられないで、一切大地を衆僧に布施したのであるから、四億金を以てこの大地を僧伽から買ひ戻して、サンパデーの治めるべき国土としようと定めたといふのである（阿育王伝三、卷五〇、一一〇—一一一頁）。この伝説はアショールカ王が仏教の寺塔建立に力をそゞぎ、莊園を多く寄進したために、王室の経済が傾いたことを示すものであるといはれる（中村博士「アショールカ王の宗教政策」）。

（中村博士「アショールカ王の宗教政策」）  
（仏教史学、第五卷、第二号、四四頁）。

（阿育王伝三、卷五〇、一一〇—一一一頁）  
（阿育王経五、大正、卷五〇、一四七—一四九頁）。

大史の伝へるところによると、アショーカ王は在位三十七年で崩じたといひ (XX, 6)、それは西紀前二二三年に当るとされてゐる。そしてアショーカの出生を西紀前三〇四年に推定するムーカージの説に従ふと (Asoka, p. 44) 王は七十三歳で崩じたことになる。

アショーカ王の子女は、その名の伝へられてゐるものに、マヒンダ、サンガミッター、クナーラ (Kunāla 法益、法増)、ティーヴァラ (Tivara) の四人がある。マヒンダとサンガミッターは兄妹で、セイロン島に仏教を伝へたことが島史、大史等に記されてゐる。クナーラは明眸の故に継母ティッサラッカーに恋慕され、遂に両眼を抉られるといふ悲劇物語が、Divyāvadāna (p. 705ff.) 阿育王伝三、阿育王経四などに伝へられてゐる。ティーヴァラの名はアラールハーバード石柱の皇后詔勅に見える。

アショーカ王の歿後、マウリヤ王朝の王統を継いだのは二人の王孫であった。その中ダシャラタ (Daśaratha) はマガダ国を領有して、東方を支配し、クナーラ王子の子サンプラテイ (Samprati) はウッチャインに都して、ラージプターナからカーテイアーワールあたりまで支配してゐたらしい (Cambridge Hist. of India, Vol. I, p. 166)。ダシャラタはナーガールジュニー窟院をアーデーヴィカー教徒に寄進したことが、ナーガールジュニー碑文に見えてゐる。

アショーカ王以後のマウリヤ王朝の系譜を、婆羅門側の資料と仏教側の資料によって挙げると次のやうになる。(Cambridge History of India, vol. 1, p. 511)。

婆羅門資料

仏教資料

1. Kunāla (Art. Suyāśas) 在位 8 年

1. Kunāla

2. Bandhupālita (Kunālaの子) 在位 8 年

2. Samprati

3. Indrapālita.

3. Brhaspati

4. Daśona. 在位 7 年

4. Vrishasena

- |   |                |
|---|----------------|
| 5. Daśaratha, 在位8年                                  | 5. Pushyadharm |
| 6. Samprati (Xlt Sangata) 在位9年                      | 6. Pushyamitra |
| 7. Śaśūka, 在位13年                                    |                |
| 8. Devadharman (Xlt Devavarman 或lt Somaśa man) 在位7年 |                |
| 9. Satadhanvan (Xlt Saśadharman) 在位8年               |                |
| 10. Brihadratha, 在位7年                               |                |

婆羅門側の資料と仏教側の資料とでは王名も代数も相違してをり、また婆羅門側資料はマウリヤ王朝の期間を一三七年としてゐるにかゝはらず、個々の王の在位年数を合計するとそれを超過するので、何れの側の資料も信用し難い。王統がこのやうに著しく相違してゐるのは、アショーカ王の歿後、マガダ王国が分裂したことを物語つてゐるものと思ふ。

そしてさきに述べたサムプラテイの王系は、西紀前一九〇年頃インドに侵入してきたバクトリア王デメトリオスのために倒されたやうであり、マガダのダシヤラタの王系は、ブリハッドラタ王の時、西紀前一八四年、部下の將軍プシャミトラ (Pushyamitra) のために倒されたと伝へられる。プシャミトラの立てた王朝をシュンガ (Sunga) 王朝といひ、マウリヤ王朝は建国以来、凡そ一五〇年で滅亡したのである。

## 追記

八月三十日、国際宗教学宗教学史会議の最終日、フランスのセム民族の宗教研究家デュポン・ソンメ (A. Dupont-Sommer) 氏は、去る四月、アフガニスタンの南のカンダハルの近くで発見されたアショーカ王碑文について紹介発表して、大きなセンセーションを起した。氏の発表によるに、この詔勅はギリシア語とアラム語に翻訳されて岩石に彫りつけられたもので、冒頭にギリシア語の部分が十四行、そのすぐ下にアラム語の部分が七行半あり、何れも同一のインド原文を翻訳したものであるが、アラム語訳の方がインド原文に近いやうに思はれると述べられた。次にアラム語訳を氏が英訳したものを紹介する。

Ten years having passed (?), it happened (?) that and

Lord Priyadarsi the King became the instaurator of the Truth, since then, evil diminished for all men, and all infertunes (?), he caused to disappear, and upon all the earth (reju) peace and joy. And further more, (it happened) that his about food: for our Lord the King few (animals) are killed, seeing this, all the men ceased (killing animals): even (?) those who catch fishes=fisher(man) these are un-ject to prohibition. Similarly, those who were without restraint those have ceased being without restraint. And (reigus) obedience to his father and to his mother and to old people, according to the obligation set on everyone by for-tune. And there is no judgement for all pious men. This

(= the practice of the Law) was profitable for all men, and shall be evermore.

この詔勅は岩石に刻されてゐるので、いはゆる岩石詔勅かと思はれるが、アショーカ王の灌頂十二—十三年に発布された十四章から成る岩石詔勅には、これと内容の一致するものは現在のところ見出されない。これがインド原文の忠実な翻訳だとすれば恐らく十四章全体の趣旨を要約して、十四章詔勅よりやゝ遅れてカンダハル地方に発布したものかも知れない。

それはとにかく、こゝで問題になるのは下線を引いた部分、即ち「(灌頂)十年を過ぎて天子慈眼王は真理の創造者となつた」といふ文章である。これに対応するものは岩石詔勅第八章に「天子慈眼王は灌頂十年に當つて正覚 (sambodhi) に達した」の文がある。本論でも述べたやうに、第八章のこの部分の解釈は一般には灌頂十年を過ぎて王が正道に入ったの意にとり、D. R. Bhandarkar が sambodhi を釈尊が成道した菩提樹の意にとつて以来、灌頂十年を過ぎて、王は仏陀伽耶の菩提樹に往詣したといふ新しい解釈が現はれるやうになつた。その何れの解釈も、アショーカ王が正覚したといふことはあり得ないといふ前提に立ってゐる。しかしさういふ先入観は仏陀を超人間的存在と観る大乘仏教の伝統思想に災された解釈であつて、さういふ謬見は此度のカンダハル詔勅によつて是正されるべきであらう。従つてアショーカ王が灌頂十年に正覚を得たといふ解釈は、カンダハル詔勅のアラム語訳によつて立証されたといふことができる。

この解釈に基いて、アショーカ王の成道の過程についての従来の見解を批判しつつ、愚案を簡単に述べて見たい。(灌頂八年とか灌頂

十年などといふ数字の属格又は具格は、灌頂第八年、灌頂第十年を示すものと見ておく。宇井博士は小岩石詔勅の文章から解釈して、アショーカ王が優婆塞で余り熱心に精進しなかつた期間を灌頂第七年の中頃から第十一年までの三年半有余であるとし、それからの一年有余は僧伽に近づき、ピック・ガティカになって熱心に精進し、そして灌頂第十一年に正道に入つたと見られる。アショーカ王に大きな苦悩を与へ、深い悔恨の念を起させた灌頂第九年のカリンガ征服は、熱心に精進しなかつた優婆塞の期間の出来事であつて、他の学者の解するやうにカリンガ征服が帰仏の原因と認めることは不可能であると論じてゐられる。  
（「印度哲学研究」第四、  
三二八—三三二頁）

けれどもアショーカ王が灌頂十年（灌頂第十一年と見てもよいが）に正覚を得たとすれば、正覚といふ事件は一年有余の熱心な精進の結果と見るのが自然であり、正覚を得て直後にそれまでの経過を追懐して小岩石詔勅を發布し、それにつづいて正覚の体験に基いてインドのみならずヨーロッパ、アフリカにも正法を弘めようとして、灌

頂十二年、十三年に十四章詔勅を發布したものと考へられる。それならばどういふ原因によつて僧伽に親近し、熱心に精進するやうになつたかといへば、その契機となつたのが灌頂八年のカリンガ征服であつたと思ふ。時間的にも一年有余の文に適合するし、また勅文には戦争が帰仏の原因と書いてはなくても、繰返し繰返し勝利者の悲哀と悔恨の情を叙してゐるのであるから、心理の必然としてこれが契機となつて僧伽に近づき熱心に精進したと解すべきであらう。優婆塞として余り熱心に精進しなかつた二年半、或は三年半の期間には、カリンガ征服以前、灌頂五年或は四年の中頃から灌頂八年までの間に考へられる。

灌頂十年に王の成道を認めて、こゝに至るまでの精神的過程を上のように解したのであるが、この論拠に立つと年時をもたないアショーカ王の諸詔勅も、従来と異つた順序配列になると思ふ。しかしアショーカ王詔勅の發布年時の問題は、次の機会に論ずることとする。

本学教授